富山大学人文学部令和二年度卒業論文

まちづくりへの参加から学生は何を学ぶのか
――高岡クラフト市場街の事例――

人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号　11610081
瀬河佑太

〈目次〉

第一章　問題関心・・・

第一節　八戸学院短期大学ライフデザイン学科の事例・・・・・・・・・・・・・１３
第二節　福井大学EMP実行委員会の事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
第三節　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
注・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
引用・参考文献リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

第一章　問題関心

地方からの若者の流出や高齢化が問題になっており、多くの地域で「まちづくり」「まちおこし」が行われ、地域の伝統を受け継ごうと努力している。そしてその中で、地方国立大学も地方創生の拠点として活動することが求められている。富山大学芸術文化学部でも多くの事業やイベントを行っており、高岡クラフト市場街もその一つである。高岡クラフト市場街は高岡市や高岡商工会議所などと連携しながら毎年開催しており、学生が実践的に地域に関わるプロジェクトとしても位置付けられている。では、まちづくりイベントはそれに取り組んだ学生にとってどのような効果があり、一方で学生側はそれをどのような場として考えているだろうか。学生から見たまちづくりイベントについて考えていきたい。

第二章　学生参加の事例

第一節　八戸学院短期大学ライフデザイン学科の事例

馬場（2016）は八戸学院短期大学ライフデザイン学科(1)の学生による八戸せんべい汁研究所の活動に学生サポーターとして参加していることついて取り上げている。2003 年八戸市内の有志により「八戸せんべい汁研究所」が設立された。「ご当地グルメのまちおこしの祭典！B-1 グランプリ」は八戸せんべい汁研究所が中心となって考案されたまちづくりイベントである。

八戸せんべい汁研究所は八戸市内の有志により 2003 年に結成された団体であり、八戸市の活性化のために活動している。活動内容は 2006 年に第一回が開催された食イベント「ご当地グルメのまちおこしの祭典！B-1 グランプリ」において毎年八戸せんべい汁を提供している。また八戸市内八戸市内の水産加工メーカーや八戸市内のホテルと共同でせんべい汁商品の開発によって八戸せんべい汁のブランド商品化を推進したり、「八戸せんべい汁アカデミー」にて八戸せんべい汁研究所の取り組みやおもてなしの精神を飲食店等の人々に学んでもらい、「八戸せんべい汁おもてなしマイスター」として地域に八戸せんべい汁を広めたりする活動をしている。イベントに関して、八戸せんべい汁研究所の Facebook ページ（八戸せんべい汁研究所 2021）によると、B-1 グランプリだけではなく、不定期で開催される小さな食イベントや八戸のサッカーチーム・ヴァンラーレ八戸のホームゲーム時にせんべい汁を提供したりしている。

学生が八戸せんべい汁研究所の活動に参加したきっかけは、2010 年のボランタリデーで八戸市の高齢者と市内散策や昼食を食べるという企画を実施したことである。ボランタリデーとは、ライフデザイン学科が 1 年に一度、地域貢献を目的として開く行事のことである。その時に昼食提供したのが八戸せんべい汁研究所であり、これを機に学生と連携するようになったようである。2010 年 10 月「北海道・東北 B- 1 グランプリ」で学生を募ったところ、初めは活動に対してモチベーションの低い学生も多かったが、教員が率先してイベント活動をし、学生を牽引する役割を果たすことで学生も率先して行動するようになった。結果的にまちおこしには若者の力が不可欠だと感じさせることになった。

学生たちは B-1 グランプリ等のイベントに参加するだけでなく、八戸市内の飲食店への募金箱設置やパンフレットの配布などにも参加している。また 2011 年の東日本大震災の際には、被災地支援として宮城県石巻市で炊き出しや物資配給を行なっている。1 年生は八戸市内の活動を中心に学習し、 2 年生からはそれらを踏まえて県外イベントへも積極的に参加するように設定されているとの記述があるが、詳細は不明である。またこの活動が実習と

して単位が認定されるかどうかに関しては記述がない。

馬場（2016）はまちおこし活動に学生が参加する意義に関して以下のように述べている。学生がイベントに参加することで、学校という閉鎖された社会で生活する学生が一般社会に触れる事になる。そこで社会人と触れ合うことで、さまざまな考え方、常識、礼儀作法などを自然に学ぶ。また八戸せんべい汁研究所のメンバーは企業経営者、会社員、教員など多様な人がおり、彼らと触れ合うことが学生を成長させていると述べている。またまちおこし活動を通じて地域を学び理解し、地域に誇りを持つことができるようになることが、学生にとっても地域にとっても重要であると主張している。

第二節　福井大学 EMP 実行委員会の事例

羽田野（2014）は、「福井大学 EMP 実行委員会」（以下、EMP）の学生がまちづくり活動に関わった事例を取り上げている。EMP とは「駅前プロデュース」と「Enjoy Mytown Project」の二つの言葉の頭文字である。車社会により空洞化した福井駅前の中心市街地を活性化する目的で活動している。EMP が発足したきっかけは、2009 年、当時の福井大学生が、奈良県の学生団体による地域活性化イベントに参加し、参加した学生が羽田野に相談を持ちかけたことである。奈良県の地域イベントの詳細は不明である。当時福井駅前再開発計画と市民の求める街づくりのあり方とのギャップが問題視されていた時期であったため、福井駅前活性化に焦点を絞って活動することとなった。初年度の 2010 年度から 2013 年度の間に EMP のメンバーとして活動したのは合計 48 名であり、そのうち女子が 43 名である。一番メンバーが少なかった 2011 年度は合計 8 名、一番多かったのが 2010 年度と 2012 年度の 15 名である。

2010 年度の活動は①福井県内外の学生が駅前活性化プランを練るワークショップ「駅前プロデュース in 福井」の開催②それに基づくまちづくり提言書の刊行である。

EMP は駅前活性化ワークショップ「駅前プロデュース in FUKUI」を開催したり、別の年度には小学生を対象に「福井の未来を担う子どもの育成プロジェクト」を通じて福井市を盛り上げたりしている。

羽田野は東京大学社会科学研究所ほか（2011）の「『福井の希望と社会生活調査』結果の概要」において、20 代の若者が地域活動に参加しない最も大きな理由が「参加の仕方がわからない」であったことを取り上げた。この状況を把握した上で、若者の地域参加の例として EMP の学生を取り上げ、地域活動参加が若者に与える影響について論じている。羽田野は若者に地域活動の機会を提供することは、彼らの将来やキャリアへの展望とそれに向けた展望に良い変化をもたらすと述べている。また、若者の地域活動の参加が、地域への関心

を高める上で効果をもたらすと主張している。

第三節　この章のまとめと分析の着眼点

この章では他の地域イベントに学生が参加する事例を説明してきた。これらの事例は第三章で取り上げる高岡クラフト市場街とは学生の参加動機や参加の仕方の点で異なっている。本論文ではこれらの事例と高岡クラフト市場街の違いと学生から見た地域イベントに必要なあり方について、高岡クラフト市場街に参加した学生のインタビュー調査から論じていく。

第三章　高岡クラフト市場街について

第一節　調査概要

これまで高岡クラフト市場街に関わる 4 名の方にインタビュー調査を行った。

第一回インタビュー（対面）
日時：2019 年 11 月 12 日（火）
場所：富山大学高岡キャンパス芸術文化学部
インタビュイー：有田行男芸術文化学部准教授
「特別実習（「高岡クラフト市場街」プロジェクト実習)」の担当教員。2014 年に富山大学に赴任し、2015 年から本格的に高岡クラフト市場街に関わる。高岡クラフト市場街実行委員会副委員長であり、社会人と学生の橋渡しをする存在でもある。

第二回インタビュー（オンライン）
日時：2020 年 6 月 7 日（日）
インタビュイー：河原つかささん（芸術文化学部 OG）
2018 年 3 月卒業生で、在学中はクリエイ党 (2) で活動していた。卒業後は株式会社能作で勤めており、高岡市に住んでいる。クラフト市場街には 4 年間参加した。

第三回インタビュー（オンライン）
日時：2020 年 8 月 14 日
インタビュイー：N さん、K さん（芸術文化学部 3 年）
二人とも 1 年次から 2 年間高岡クラフト市場街に参加しており、クリエイ党の部員でもある。K さんはクリエイ党のサークル長（クラフト市場街ではリーダーのような役職ではない)。N さんは長野県出身、K さんは山梨県出身。

第四回インタビュー（第三回の追加インタビュー）
日時：2020 年 11 月 13 日
インタビュイー：N さん、K さん（芸術文化学部 3 年）
場所：富山大学高岡キャンパス 1F 講義室

第二節　高岡クラフト市場街とは

第一項　概要

高岡クラフト市場街は、富山県高岡市の中心市街地に於いて開催される、クラフトに関する統合イベントである。その中で「工芸都市高岡クラフト展」「ミラレ金屋町」を中心に、ワークショップ、フード販売などを含む６０以上の小さなイベントが同時多発的に行われる。なお、2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、工芸都市高岡クラフト展の公募中止、ミラレ金屋町の開催が中止された。クラフト市場街は YouTube チャンネル等によるオンラインで開催され、内容はオンライン配信による工場・工房見学、職人との交流会、音楽ライブ等であった。

第二項　歴史

高岡市は、歴史的に銅器や漆器の製造をはじめとした伝統産業が盛んな地域である。1986 年に地場産業の活性化を目的に工芸都市高岡クラフトコンペティションが誕生し、同時にその展示会である工芸都市高岡クラフト展も毎年開催されてきた。ところが、有田准教授によると日本で三つの大きなクラフト展の 1 つである朝日現代クラフト展が消滅するなど、日本のクラフト自体が衰退してきている流れがあり、2011 年に工芸都市高岡クラフト展の来客数も大幅に落ちた。工芸都市高岡クラフト展は、高岡市の伝統産業の保持に重要な役割を果たしていたため、高岡市と富山大学芸術文化学部はこの状況を危惧し、2012 年から来場者を増やすために工芸都市高岡クラフト展と同日に高岡クラフト市場街を開くことになった。また、2016 年からは、毎年同時期に開催していた金屋町楽市 in さまのこ（のちのミラレ金屋町）も同日開催することになった。

第三項　運営団体

高岡クラフト市場街は高岡クラフト市場街実行委員会が主催であり、その他に高岡市、高岡商工会議所、高岡市デザイン・工芸センター、富山大学芸術文化学部、高岡伝統産業青年会が関与している。市の予算や大学の予算が 4 月に出る関係で、実行委員会が組織されるのは例年 5 月からで、8 月まで準備をし、9 月に本番を迎える。

第三節　実習化以前の学生参加

このクラフト市場街の活動は 2016 年度からプロジェクト実習の授業としても位置付けられているが、学生参加が実習化する前からイベントに関わっていたのは「クリエイ党」と「高岡 HUB 計画」という高岡キャンパスの 2 つのサークルの学生である。

第一項　クリエイ党

クリエイ党は 2007 年に生まれたサークルである。富山大学芸術文化学部の前身である高岡短期大学の卒業生が、伝統工芸の職人と芸術文化学部の学生と合同でものづくりをするために立ち上げた。学生がクラフト品をデザインし、それを職人が形にするという活動を行っている。そこで作ったクラフト品を、毎年高岡クラフトコンペに出品していたが、クラフトコンペが衰退するとサークルの存在意義がなくなるため、高岡クラフト市場街にも参加するようになった。2012 年の第 1 回からサークルで作成したものを展示する「クリエイ党展」を開催しており、クラフト展に入賞しなかった作品を山町筋にある、土蔵造りの街資料館で展示している。最初から学生が参加していたが、運営に携わるようになるのは 2014 年からである。人数は全体で 10 人から 15 人くらいのサークルで、そのうちクラフト市場街に参加するのは 3 分の一くらいである。

第二項　高岡 HUB 計画

高岡 HUB 計画は元々、高岡駅の Curun 地下街で自分たちが考えたワークショップなどを行うサークルだった。案内役として 2015 年から関わるようになる。2016 年以降、この活動はプロジェクト実習としてサークル外の学生も参加できる形になるが、高岡 HUB 計画の学生も継続して関わっている。実習に関しては第四節で述べる。

第三項　この節のまとめ

以上のようにサークル活動の基盤はあったが、学生参加の枠組みを作ったのは、プロジェクト実習である。実習化されて以後はサークルに所属していない学生もクラフト市場街に参加している。従って、後でサークルメンバーへの調査も報告するが、あくまで芸術系の専門と関心を持つ学生として捉える。

第四節　プロジェクト実習での学生参加

第一項　実習化の経緯

2015 年の高岡 HUB 計画の案内所としての活動は 2016 年から「特別実習（「高岡クラフト市場街」プロジェクト実習）」として、授業として単位（２単位）が取れる仕組みになっている。有田准教授が主に担当しており、高岡クラフト市場街の運営に関わることの教育的効果が期待されている。これによって、サークルに入っていない学生も運営に関わることになった。

第二項　特別実習（「高岡クラフト市場街」プロジェクト実習）の内容

他の授業とは違って 6 月からスタートする。高岡クラフト市場街自体が 2012 年から始まり、歴史がまだ浅いため、毎年一から学生がイベントの中で自分たちができることを試みるという形式をとっている。ただし、一度始めた企画を簡単にやめるのは勿体ないということで、固定化されている企画もある。クラフト市場街に来たお客さんを案内する市場街コンシェルジュや、そこで渡す市場街パスポートの作成、クラフト市場街の拠点である山町ヴァレーのガラス面デザインは固定化された企画である。履修者は不安定で、一番多い年はコンシェルジュのブースを 5 箇所構えたこともあったが、履修者が少ないときや、他の活動のニーズがあった時には 1 箇所にすることもあった。

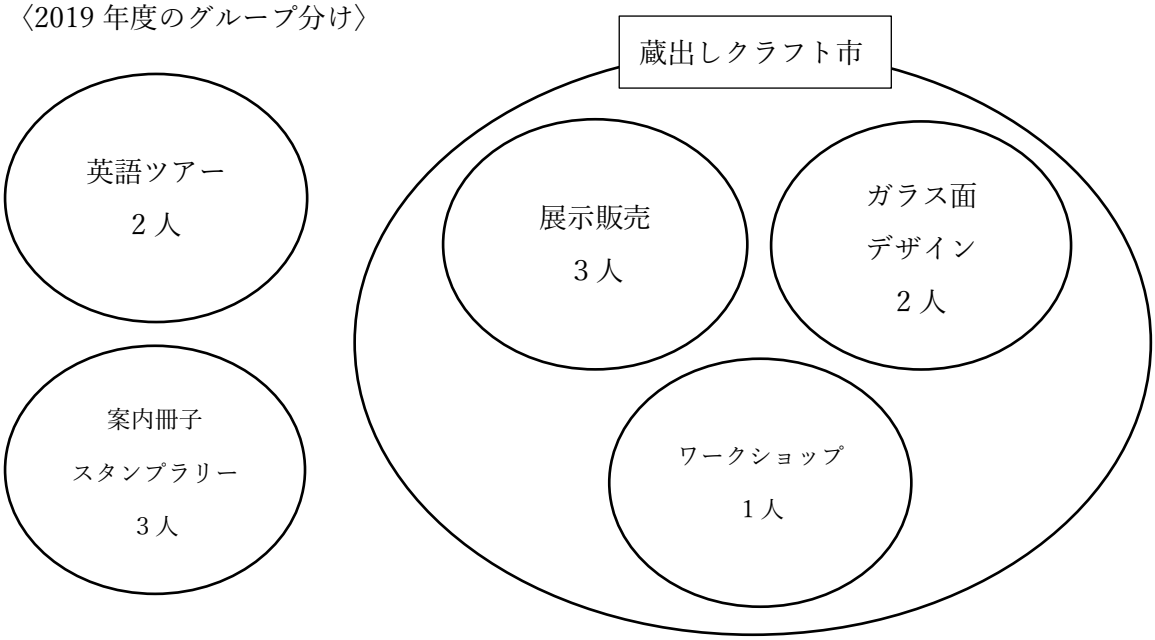
第三項　本番を迎えるまでのプロセス

6 月クラフト市場街に参加する学生（履修者）が集まる。初回の実習では有田准教授が実行委員会で話し合い、今年はどういった活動をやりたいかというざっくりとした案をいくつか学生に発表する。それを受けて学生がどの活動に参加したいかを選び、グループを作る。その後、学生らが意見を出しあい、大雑把なアイデアをより具体的な形にする。実行委員会から有田准教授を通じて学生に降りてくるアイデアとしては、例えば「高岡の蔵に眠っている商品を、安く売る企画がしたい」（これが K さんと N さんが 2 年目に携わった蔵出しクラフト市になった。）「山町ヴァレーを宣伝の拠点にしたい」（K さんが 1 年目に携わった活動）といったものである。

初回では学生が、自分がクラフト市場街でどんな活動をしていきたいかを、将来の進路希望なども視野に入れながら発表するという、個別に目的設定をする機会が設けられる。そして学生がグループに分かれて考えた企画案が実行委員会に承認されたら、9 月末の本番まで隔週で授業時間として集まり、進捗状況を発表する。このとき、教員からアドバイスやフィードバックがあるが、その内容はスケジュールや時間管理に関するもの（英語ツアーの時間はもう少し短い方がスムーズに運営できるなど）や、運営面で考えられていない部分の指摘が主で、企画コンテンツ・内容に関する意見はほとんど出されない。なお、グループでの話し合いや活動の日時や頻度は各グループに委ねられており、昼休みや放課後を活用して話し合いを行うようだ。実習参加学生の全員が集まる機会は隔週で開かれる実習の時間のみである。

本番当日はグループ単位での活動に囚われることはなく、適宜人手の足りないところを手伝いに行くように流動的な動きをとる。なお、2019 年度に学生が関わった企画と人数の内訳は以下の図の通りである。

〈2019 年度のグループ分け〉



N さんと K さんのインタビューから、英語ツアーとはクラフト市場街に来場する外国人客向けの企画である。ガラス面デザインとは、K さんが携わった山町ヴァレーのデザインのことであり、ワークショップとは、ジェルキャンドル作りのことであるが詳細は不明である。

第五節　参加者からみたクラフト市場街 1 —— 河原さんの事例

第一項　参加した経緯

河原さんは大学一年生のときクリエイ党に入部し、それがクラフト市場街に参加することになったきっかけである。クリエイ党に入った理由は、ポスターやチラシによる広報活動ができることだった。デザイン情報コースに所属していた河原さんは元々ポスター制作などに興味があり、クリエイ党入部後もクラフト品の製作に携わりながらも広報担当として活躍した。

第二項　活動内容

クラフト市場街には一年次から四年間関わった。社会人になった今も、企業として参加している。大学一年次から 3 年次はクリエイ党展を引き続き行い、2 年次は市場街パスポートの製作に携わった。それまではクラフト市場街のパンフレットの中のページだったものを市場街パスポートとして独立させ、デザインも新しくした。またこの年からクリエイ党もコンシェルジュの役割を担うようになり、河原さんも担当した。大学 4 年次にはクラフト市

場街の実行委員会メンバーとして携わり、参加店舗へ挨拶に行ったり、昨年度の課題から今年度のイベント内容を考えたりした。なお、実行委員会は主要メンバーの１０人程度＋αで構成される曖昧な組織のようである。卒業後は株式会社能作(3)の社員としてクラフト市場街に携わっている。

第六節　参加者からみたクラフト市場街２ —— Ｎさんの事例

第一項　参加した経緯

Ｎさんは現在、富山大学芸術文化学部芸術文化学科の３年生である。入学した頃Ｎさんは特別にものづくりが好きというわけでもなかったが、「職人に会える」という機会に魅力を感じて、クリエイ党に入部することにした。そこで先輩に誘われクラフト市場街に参加することになった。また自分が県外出身であり、知り合いの幅が広がりそうであるということも参加した動機であると語った。実習初回の目的設定の場では、「人とコミュニケーションをとるのが苦手だからもうちょっと上手くなりたい」と発表した。

第二項　一年目の活動 —— 作家の引き出し展

Ｎさんは、一年次はクラフト市場街の中の「作家の引き出し展」という企画を担当した。作家の引き出し展とは、クラフトコンペで入賞した作家の、（入賞した作品ではなく）普段作っている作品を展示販売するという企画である。当時のクリエイ党の三年生の先輩がリーダーとなり、Ｎさんはその手伝いをしたという。活動内容は、先輩と一緒に出品商品の管理（作家から預かった商品在庫の数と返すときの数があっているか）などの事務的作業と、ディスプレイの仕方を考えたり、当日のアテンドや販売の手伝いをしたりした。

一年目は、先輩の手伝いが中心で、自分からアイデアを出したりリーダーシップを発揮したりするような場面がなかったが、企画を通じて、イベントが様々な人たちの支えによって成り立っていることを学んだようである。学生だけではない多くの人と関わりを持ったりコミュニケーションをとったりすること自体が勉強になったと語っている。

第三項　二年目の活動 —— 蔵出しクラフト市

二年次はプロジェクト授業として参加し「蔵出しクラフト市」という企画を担当することになった。企画の内容は、高岡のお店の蔵に眠っているような、今店頭に並んでない商品を少しリーズナブルな価格で展示販売するというものである。この企画は、当時実行委員会からのアイデアが元で実現された企画であり、Ｎ さん達はその初めての企画を一から立ち上げることになった。6月に実習が始まり、9月末の本番までやっておくべき準備は多く、尚

且つこの活動に前例がなかったため、かなり忙しかったようである。出品してもらうお店を決める段階から、どんな商品を出品してもらい、いくらの値段で売るのか、そういったお店との連絡や打ち合わせも基本的には全て学生が行った。N さんは一から企画を立ち上げるという経験に深く関与することによって、一つの企画を実現するためには多くの手続きがたくさんあり、それによって物事がスムーズに進むのだということを学んだと語っている。

二年目は全部一から動かさないといけないっていうか、お店さんにも電話かけていつ伺っても大丈夫ですか、とかそういうことをやったりとか、どうやって並べるかとか全部そういうの考えて。二年目は本当に企画したりそれを実行したりするのが難しいというか、手続きがたくさんあるんだなって。それがあってスムーズに物事が進むなっていうのを一年目よりも身をもって感じたっていう印象ですね。

二年目にも参加した理由は（1）楽しかった（2）去年やったことが活かせそうだった（3）単位が欲しかったからである。（2）に関しては、一年目には先輩たちの手伝いをさせてもらい、気づく点も多く、来年自分でも先輩たちのようにやってみたい意識もあったという。2 年目は 1 年目と同じように、作家の作品を展示販売する活動を担当している。他の企画とは違って蔵出しクラフト市に関わろうと思った理由は、一年目にお客さんとお話をしてものを売ったりオススメしたりする仕事に楽しさを感じたことや、あるいは一年目の自分にはできなかった部分が心残りだったことである。

N さんは、クラフト市場街は自分たちが作った商品やデザインが世の中に出ていくところが魅力的であると語った。自分の作ったもの、自分の表現がどのようなプロセスを経て流通し、それを見た人がどんなリアクションをし、どんな感想を持つのか。それは世の中に流通させないと分からないものである。通常の授業では自分が作ったデザインは簡易的なイメージやデータ上のものにとどまってしまうことも少なくないという。

第七節　参加者からみたクラフト市場街 3 ―― K さんの事例

第一項　参加した経緯

K さんも N さんと同じく「職人と関わる」ことが他大学にない活動で魅力であると思い、クリエイ党に入部した。以下、クラフト市場街に参加するようになった場面である。K さんは高岡のものづくりや、N さんと同様に職人に会うことに関心があり、クラフト市場街に参加した。また、自分が今までやってこなかったような経験ができるのではないかという思いもあったという。

第二項　一年目の活動 —— ガラス面デザイン

▲山町ヴァレー

一年生の時は準備期間に山町ヴァレーのデザインを行った。山町ヴァレーは山町筋に位置する複合商業施設である。クラフト市場街では山町ヴァレーを活動 PR の拠点とし、コンシェルジュブースを構えている。K さんは当時の二、三年生の先輩と一緒に山町ヴァレーのガラス面に地図を書いた。また当日はコンシェルジュとして活躍した。コンシェルジュで初対面の大人とたくさん関わる経験は、高校まで学校のコミュニティを中心に生きてきた K さんにとって大きな学びであったという。

第三項　二年目の活動 —— 蔵出しクラフト市

二年目は N さんと共に蔵出しクラフト市の展示販売に携わった。その中で、リスクを回避することの重要性を学んだと語ってくれた。お店の人から商品を預かっている以上、しっかりと管理することは大切である。またお金が絡む部分では金額に差があってはいけないため、誰の目にもわかるような値札を作ることが大切である。お店の人とは密に連絡を取り合い、どういう決め事を作るかということが大きな学びになったと言った。

二年目も続けて活動に取り組んだ理由は、単位が欲しかったのと、一年目に取り組んだガラス面のデザインや職人さんをはじめとした街の人々との交流が楽しかったからである。

K さんも N さんのように、クラフト市場街の実践的にデザインを学べる面について言及している。

実践的に何かをやる場を求めてるところはあると思います。例えばデザインだったりとか、まあ物によっては商品化だったりとか、そういうことを授業内でもある程度やるかもしれないけど、授業でやるタイミングって結構後だったり、3 年になってからだったりとか 4 年になってからとか後半の方にそういう授業がプログラムされてることが多くて、それより先に、もうこういう特別授業で、自分のやりたいことを実現させつつ、実践的な活動ができる機会をせるために参加してるって人は多い感じがしました。特にデザイン（を専門とする学生）とか

第四章　分析

この章では、第二章で取り上げた二つの事例と、今回調査した高岡クラフト市場街に参加する学生について、参加のあり方の観点から比較する。

第一節　八戸学院短期大学ライフデザイン学科の事例

馬場（2016）によると、八戸学院短期大学ライフデザイン学科の学生のほとんどは、地元出身者である。しかし地元への関心があるという記述は見られない。また、結果的に学生が率先して活動するようになったと述べているが、八戸せんべい汁研究所の活動に参加する学生の動機に関しても記述がない。また活動内容について、クラフト市場街のように2、3人の少人数で別れて活動したりする記述もなく、学生がどのように活動に関わり、その中で何を吸収したのかという点について触れられていない。

第二節　福井大学EMP実行委員会の事例

羽田野（2014）によると、EMP実行委員会で活動する学生の地元への関心の度合いは様々であり、初めから関心が高い学生もいるが、そうでない学生もいる。クラフト市場街の参加学生の専門と関心は芸術・デザインにあり、この点で違いがある。馬場(2016)に比べて参加学生のモチベーションや活動人数などの記述は見られるが、学生が活動を通じて具体的にどんなことを学ぼうとしたのか、また何を学んだのかについては記述がない。

第三節　考察

先行研究との比較から、高岡クラフト市場街が学生参加には、地域活性化という側面だけではなく、学生にとっての擬似ビジネス体験としての場であり、さらに芸術系学生ならではの自己実現が叶う場として活きているという、他の事例にはない特徴がある。

高岡クラフト市場街は、参加する学生にとって擬似ビジネス体験ができる場であると言える。蔵出しクラフト市の経験は、創作物の価値を理解し、それを説明したり展示の演出を行ったりするというものであり、販売や営業の仕事に通ずるものである。また、高岡でものづくりをする職人に会いたいという希望も叶う。職人や高岡の店の人との出会いは、学生にとって一種の社会関係資本(4)とも言えるものであり、学生にとってのメリットであると言える。K さんは職人との関係について以下のように語る。

職人さんたちが普通に顔を見たら挨拶してくれたりとか、お疲れ様！とか、K ちゃん！って

名前を呼んでくれたとか、そういうところで、顔覚えてくれてるんだと。こんな影の薄い大学生の顔を覚えてくれてるんだっていうのがすごく嬉しいです、友達でもなんでもないのに。

また、クラフト市場街に参加する学生の参加動機はデザインを実際に形にするアウトプットの場として活用したいというものが多い。そして参加者は自分が考えたデザインや創作物を社会に流通させるという経験ができる。N さんや K さんによれば、こういった経験ができる授業は高学年にカリキュラムされていることが多いが、クラフト市場街は低学年でも、より実践的にデザインを学ぶことができる場である。K さんは山町ヴァレー壁面デザインに携わることになった。N さんはそれに加えて「コミュニケーションをとりたい」という希望が叶い、自身の成長を実感している。そもそも授業の初回では、将来どんな仕事につきたいか等を考えながら、自分はクラフト市場街で何がしたいかという活動目的を設定し、発表する機会がある。有田准教授によると、クラフト市場街では、学生のデザイン以外の役割についても臨機応変に対応し、それぞれの学生に多様な活躍ができる。hub

地域イベントに参加する学生側からすれば、その活動を通じて、自分がどんなことをしたいと思っているか、そしてどんなことができるかということが重要である。私は地域イベントに学生が参加する際には、学生ひとりひとりのやりたいことやできることが、より考えられるべきであると考える。地域の社会人が希望していることと、学生の希望していることの両方が考えられて初めて、「win-win」なまちづくりが実現すると考える。

注

（1）2017 年八戸学院短期大学部に改称、2018 年ライフデザイン学科の募集を停止しているが、八戸せんべい汁研究所の活動への学生参加は継続しているようである。

（2）本章第三節第一項参照。

（3）高岡市に本社を置く鋳物メーカーである。能作はクラフト市場街の参加企業として工場見学や製作体験の企画を行い、協賛もしている。

（4）社会関係資本とは、『現代社会学事典』さまざまなアクター（個人、集団、組織）がほかのアクターとの結合、社会的関係への制御、コミットメントを通して得る諸資源、諸利益の価値の総体である。（大沢真幸、吉見俊哉、鷲田清一編 2012: 825）

引用・参考文献リスト

・大沢真幸・吉見俊哉・鷲田清一編, 2012 ,『現代社会学事典』, 弘文堂

・高岡クラフト市場街実行委員会, 2019 , 高岡クラフト市場街
(https://ichibamachi.jp　2019 年 12 月 4 日閲覧)

・東京大学社会科学研究所ほか,2011,「『福井の希望と社会生活調査』結果の概要」

・富山大学芸術文化学部／大学院芸術文化学研究科, 2019, 地域連携教育ブログ
(https://geibun-regional.tumblr.com　2019 年 10 月 7 日取得)

・富山大学芸術文化学部／大学院芸術文化学研究科, 2019, 富山大学 芸術文化学部
(http://www.tad.u-toyama.ac.jp/index.html　2019 年 10 月 7 日取得)

・羽田野慶子,2014,「若者と地域活動－福井市における大学生のまちづくり活動の事例から－」,『社会科学研究』,65(1): 97-116

・八戸せんべい汁研究所 , 2021 ,「八戸せんべい汁研究所」（Facebook ページ）
(https://www.facebook.com/hachinohesenbeijirulabo 2021 年 1 月 10 日取得)

・馬場祥次, 2016,「まちおこし活動における学生参加の意義と課題」,『八戸学院短期大学研究紀要』42 : 35-43